

学生と高齢者の集う商店街

2年1組 藤原 拓海

2年1組 宇都宮 りお

2年1組 兵頭 叶武

2年1組 井関 なずな

2年1組 小山 穂純

2年2組 梶谷 瑳佑

指導者 廣本 真依

1 課題設定の理由

宇和島市では少子高齢化が進み、特に、若者世代の人口減少が目立っている。また、宇和島市の商店街は、かつて人々の交流の場であったが、現在は通路として利用されることが多く、交流の場としての役割が弱まっていると感じた。そこで、商店街における商店街に世代間交流の場を設けることで、地域文化の継承と商店街の活性化につながると考え、本研究の主題とした。

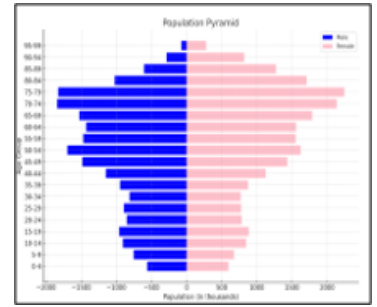


図1 2024 宇和島市人口動態

2 仮説

- (1) 商店街に世代間交流を目的とした快適なコワーキングスペースを設置することで、両者の商店街での滞在時間が延び、利便性が高まり、商店街の活性化につながるのではないかと。
- (2) 高校生と高齢者はそれぞれ違う価値観を持っている。世代間交流の場を設け、双方の価値観が掛け合わされることで、持続可能な商店街の活気を取り戻すことにつながるのではないかと。

- ・ 高校生の価値…新しい感性、体力、行動力、SNS 発信力、チャレンジ精神、情熱
- ・ 高齢者の価値…地域の歴史、伝統技術、人生経験、リスク感覚、人脈、社会的信用

3 研究の方法

(1) 実態調査

イベントなどが行われていない平日に商店街を訪れ、人の流れを調査した。通行している人の様子を観察し、どの年代の人が多いのかを確認した。また、平日との違いを知るため、イベントが行われている日にも商店街を訪れた。

(2) コワーキングスペースの実例と自動販売機設置に関する調査

商店街の空き店舗を活用し、活性化に成功している他県の事例を調べ、どのような目的で設置され、地域にどのような影響を与えているのかを調査した。また、商店街に人が立ち寄るきっかけづくりとして自動販売機の設置に着目し、設置にかかる費用や運営の仕組みについて調べた。さらに、中央公民館の「ホリバタ」や、商店街の中で高齢者の交流拠点となっている「スペースゆう」を訪問し、担当者の方から実際の運営について話を伺った。

(3) 高齢者と高校生の交流の場の設定

商店街でのイベントを通して、高齢者と高校生が交流できる場をつくることを目的に企画を行った。「スペースゆう」での助言を参考に、昭和の宇和島や商店街の様子が分かる写真を展示し、それを見ながら自然に会

話が生まれる形式を考えた。写真や資料が保存されている「タナベ昭和館」を展示場所とし、商店街の店舗へのポスター掲示や、学校の Teams を使った告知を行い、参加者を募集した。

4 結果

(1) 実地調査の結果

平日の通行人には高齢者の割合が高いこと、まだ営業していない店舗が多く見られることを確認した。イベント時には人流はかなり増え、若者の割合の増加も見られた。

	恵比寿町	袋町		袋町
若年層	5	14	14:00- 14:05	418
中年層	14	26	14:15- 14:20	375
高齢層	57	45	14:30- 14:35	391
合計	76	83		

【現地調査】 11/14(木)15:00-16:00

【現地調査】 11/17(日)「食-1うわじまの鯛食べたいフェスティバル」

(2) コワーキングスペース等の調査結果

新潟県三条市の一ノ木戸商店街では、商店街の中にある施設をコワーキングスペースとして活用し、カフェや学習、会議などに使える場所を整えていることが分かった。しかし、自動販売機の設置については、電気代や手数料などのコストがかかるため、継続して運営するのは難しいと判断した。

(3) 高齢者と高校生の交流の場所の設定の結果

イベントには地域の高齢者や高校生が訪れ、世代や立場を超えた交流が生まれた。写真展示によって足を止める通行人が見られたほか、チラシをきっかけに来場した人もいた。今回のイベントは、高校生と高齢者がそれぞれの価値を共有できる場になったと感じた。



5 考察

当初はコワーキングスペースの設置を想定していたが、調査を進める中で、イベントによる世代間交流へと方向性を変更した。しかし、いくつかの課題が明らかになった。まず、会場に階段があり入りにくいなどの物理的な制約があった。また、イベント運営に不慣れであったため、日程調整や宣伝が十分に行えず、高校生の参加が少なくなってしまった。さらに、来場者への積極的な声かけができず、交流が十分に深まらなかった点も課題である。チラシのみの宣伝では集客に限界があり、単発のイベントによる一時的な人流増加にとどまってしまった。

6 今後の展望

本研究では、宇和島市の商店街を世代間交流の拠点として捉え直すことで、活気を取り戻す可能性を示した。袋町商店街での写真展示や交流を通して、高齢者の経験と高校生の新しい感性が出会い、互いに学び合う関係が生まれた。この関係は、高齢者の生きがいや高校生の地域理解につながり、商店街の継続的な活性化につながる可能性がある。今後は、交流を継続的な取組へと発展させることが課題である。

謝辞

本研究を進めるにあたり御協力いただいた、ホリバタ、スペースゆう、タナベ昭和館、株式会社綜合社の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。